

# 石ひとすじ150年余 技の粋を尽くす石駒流

## 創業万延元年(1860)、未来へ伝承(株)石駒

「山形で石駒といえは、知らない人がいないくらい聞えた石工店である。石は硬くて朽ちない材質であり、長い時間を旅しながら、人びとがあとあとまで信心や、悲しみや歓びを刻んで伝えるために選んだものである。石造物はだから小さな墓石から、路傍の板碑、そして巨きな塔や碑にいたるまで、モニメントとして意味を持たないものはない。未来の時間への意志と意を換えることもできよう。石工とは、そういう意志を刻む人のことである」。

詩人真壁仁は山形の職人をルポしたシリーズ『手職』でそう書いた。それから40数年、(株)石駒6代目の松田勝行代表取締役社長を山形市沼木の工場に訪ねた。

— 創業万延元年(1860)、山形県で最も古い歴史を有しています。

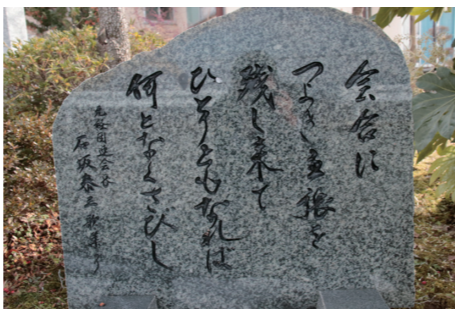
松田社長 文政5年(1822)に生まれた松田駒蔵が初代です。三日町から小荷駄町、材木町、鉄砲町にかけた界限は最上義光公の菩提所光禅寺をはじめ、寺が多いということもある。



大正7年(1918)10月、雁土山より米沢・白子神社まで東沢地区民総出で石材を運搬



「山の向うのもう一つの日本」と記したライシャワー駐日米大使寄稿文碑(山寺)



故石坂泰三元経団連会長の歌碑。石坂成成博士の記念碑と並び建つ



手彫り用のノミを焼き入れ先を研ぐ作業  
金山町で挙行された合運動公園プロムナード石貼工事、記念碑として山寺のライシャワー駐日米大使寄稿文碑、同じく山寺の俳聖芭蕉像台座

り、石工としての生活と仕事の根を据えたのでしよう。それ以前は、北前船に乗って上方からの出羽三山参拝客の案内を業としていたと伝えられていますが、明治27年の山形市南大火で書類が焼失しており、定かではありません。北前船は船底に、西国・瀬戸内海の石を入れて安定を保っていたということですから、自然と石の目利きができるという下地があったのかもしれない。初代駒蔵が作った最も古い石碑は光禅寺の「蚕祖神碑」で、これは万延元年の作です。2代目は、初代県令三島通庸が命じた羽州街道・坂巻橋架け替え工事に携わっています。そのことは、我が家に残る「明治十一年七月坂巻眼鏡手摺仕上扣帳」で知ることができます。橋は永遠不朽の意味を込めて「常盤橋」と命名され、イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが訪れています。このほか、光禅寺本堂前の堀の太鼓橋や、市南大火で破損した三日町・十日町・八日町界限の商家の墓碑を再建しています。「石駒」という名で、山形で初めて店を構えたのが三代目です。それまでの石工は、道具と手弁当をかつ

いで寺なら寺に通い、小屋掛けをして石材を刻んだり磨いたりしていたのです。三代目は父の言い付けで、当時全国で一番大きな石工店であった東京・青山墓地入口にある石勝を見学。店を持ち、看板を掲げて注文を取りながら、作業場で大勢の職人が墓石を刻んでいる様子を見て自宅を作業場にしました。4代目は兄2人が東京帝国大学を出て東京の会社に就職したことから、父に弟子入りして、住み込みの徒弟と一緒に工場側の長屋に寝起きし、厳しい修業を経て数多くの優れた石仏や鳥居、狛犬を残しました。

— 「石駒流 未来伝承」という言葉を掲げています。

松田社長 5代目の父松田勝彦の強い思いです。150年を超える歴史と伝統の中で育まれた石工としての匠の技に、新しい技術と近代設備を加え、その一つ一つに心を尽くそうということです。墓石はもとより、文翔館周辺の修景施設整備、県立図書館・遊学館の外部石工事、県総

### (株)石駒

創業 万延元年(1860)  
設立 昭和48年(1973)  
取締役会長 松田 勝彦  
代表取締役社長 松田 勝行  
本社 山形市十日町3丁目10番20号  
☎023-622-3364  
工場 山形市大字沼木字高野内2274  
☎023-644-3380  
営業品目 墓碑・記念碑・石彫・石工事  
外構工事・造園工事・土木工事



大正13年(1924)、旧門伝村の人々が寄進した狛犬を修復する(株)石駒6代目の松田勝行社長

た全国植樹祭記念碑など手掛けています。平成22年11月、免疫学の世界的権威である石坂成成先生夫妻の記念碑を山形市の自宅前に建立しました。碑文には叔父である元経団連会長石坂泰三氏の「無事貴人」の揮毫を刻し、記念碑の隣に、泰三氏の歌集の中から「会合につよき主張を残し来てひとりともなれば何となくさびし」を選び歌碑を建立しました。石坂先生は昨年7月に92歳で亡くなりましたが、先生の功績と温かな人柄を後世に伝えたいという父の石工としての思いからです。

— 昨年10月に代表取締役社長に就任されました。抱負を。

松田社長 現在、門伝の八坂神社の狛犬の修復を手掛けています。95年前に三代目が製作したものです。凝灰質砂岩の来待石で、風雪に耐え、風化が進み目元などはボロボロになっていますが、台座に「大正13年石駒作」の銘を見たとき、造形の仕事に携わっていることに誇りと喜びを覚えました。仕事場では社員それぞれが責任を持って仕事に取り組んでいます。「石よりも固い意志」を持ち、石を通して心を通わす仕事に精進する所存です。